

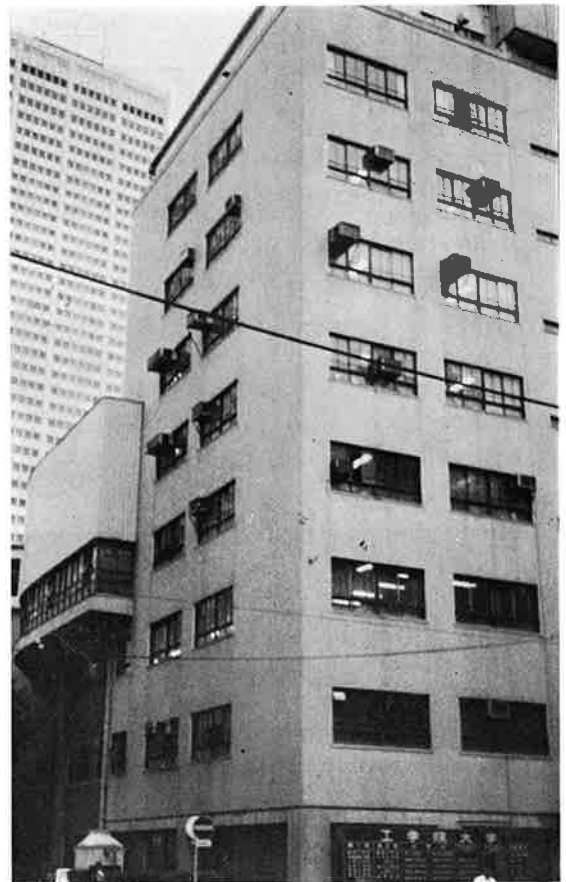
社団法人 工学院大学 校友会

第103号 **校友会報** 30卷2号

昭和57年11月



南館前方より旧校舎新校舎方面を望む



新校舎前方より旧校舎南館方面を望む
(後方は京王プラザ)

明和の土建機

振動ローラ

ハンドガイド

MRA-85型, 0.85t
MRA-75型, 0.75t
MRA-65型, 0.65t
上下回転式ハンドル
油圧式

- サイド転圧可能
 - ステアリング軽快
- MVR-30型, 3.0t
MVR-26型, 2.6t
MVR-12型, 1.2t



新開発

タイヤ
鉄輪

コンバインド

ローラ

アスファルト 舗装最適 センターピン方式

MUC-40型, 4t
(前鉄輪・後タイヤ)
MUS-40W型, 4t
(前後共鉄輪)



パイプローラ

ベルト掛け式
RA-120kg
RA-80kg
RA-60kg



ランパローラ

RT-75型
エンジン直結式
オイル自動循環式



コンクリート

MC-10型
MC-12型
MC-22型
MC-30型



(カタログ進呈)

株式会社 明和製作所

川口市青木1丁目18-2 〒332

本社・工場 Tel. (0482)代表(51)4525~9
大阪営業所 Tel. (06)961-0747~8
福岡営業所 Tel. (092)411-0878・4991
広島営業所 Tel. (0822)93-3977(代)・3758
名古屋営業所 Tel. (052)361-5285~6
仙台営業所 Tel. (0222)96-0235~7
札幌営業所 Tel. (011)822-0064

修繕P-9型
理装P-8型
整形VP-8型
VP-7型
KP-6型



社長 月原 貢 (機58)
昭和43年春 勲四等旭日章
昭和53年秋 紺綬褒章



中央公園大噴水

— も く じ —

| | |
|----------------------------|-----------------------------|
| ○まちがった答のない問題……………伊藤 鄭爾…2 | ○十年一昔……………南 喜八郎…12 |
| ○校友会に期待するもの……………平川 紀一…3 | ○近況報告 ・学校法人……………13 |
| ○本学の大学院について……………山口章三郎…4 | ・大 学……………13 |
| ○ホロニックス・バス……………柿沼 敏雄…5 | ・高等学校……………15 |
| ○校友の皆様へ……………正木 三省…6 | ・専門学校……………15 |
| ○世界の俳句……………松尾 靖秋…7 | ○校友会だより……………16 |
| ○同窓会だより | ○支部だより……………17 |
| ・日本に於て生産される「小型車」は | ○昭和58年度大学入試日程決まる……………18 |
| なぜ1,500ドルも安いのか……………山崎 隆一…8 | ○昭和57年度支部長会議報告……………落合 康男…19 |
| ・創立百年の年輪を数年後に | ○工学院大学校友会支部一覧表……………20 |
| 迎えて母校に望む……………内山 太…8 | ○信頼性品質管理について……………中野 善衛…21 |
| ・建築学科同窓会だより……………南迫 哲也…9 | ○昭和58年度高等学校入学考査案内……………21 |
| ・応化会健全発展のために……………富所 良二…9 | ○かけあし一年のなげき……………榎本 忠良…22 |
| ・高校同窓会だより……………足立 剛一…10 | ○役員役務分担表……………23 |
| ・学園将来計画について……………南雲 芳夫…11 | |



まちがった答のない問題

学 長 伊 藤 郷 爾

小学生でもできる算数の問題である。ただし正解のない問題である。

(問題)

(a) $3 + 2 \times 1.2 = 27$

(b) $3 + 2 \times 1.2 = 5.6$

どちらの答もまちがっているが、これに10点満点で採点して、その点にした理由を述べよ。

ついでながら述べておくと (a)の回答では1.2を12と勘違いした数字があげられている。つまり小数点を見おとした形になっている。(b)の回答は1.2を1.3と勘違いして計算した数字になっている。

実をいうと私は、この種の問題を大学院生に出した。ほとんど異口同音に彼等が言ったことは「今までの教育でよくうけてきたように○×式で答えれば実に簡単で、両方とも0点である。しかしよく考えてみるとむつかしい問題だ」というのである。「誰に相談してもよい、どの本を参考にしてもよい」と言っておいたけれど、そんなことをしてみても大して足しにはならない。しかし答は書かなければならないし、その理由も書かなければならない。

そこでさまざまな採点がでてきた。両方とも0点にする者、4点、6点や2点、8点にふりわける者などさまざまであった。しかしこの出題の最大のポイントは、何点にしてもよいから、いかによく考えてあり、それが

三者に説得力をもつかという事にある。となると問題は短く簡単なようだけれど、考えれば考えるほどむつかしくなる。そして私としての評価の基準は、いかに論理的によく考えてあるかなのである。

重ねていうけれど正解はないというのが、私の立場である。答案用紙をうけとった後で、私はひとつの回答理由を述べた。それは次のようなものである。

正しい答えは5.4である。これは暗算でもできる。もし君たちが社長が構造計算屋になったとし、部下から上記の数字をうけとった時、どちらが正しい数字との違いが大きいかを考えたとする。(a)では21.6で、(b)では0.2である。両者の違いの数字は10.8倍である。もしこれがお金の数字だったとすると (a)は21万6千円まちがえて (b)は2千円まちがえたことになる。だから計算を違えた点では同じだけれど影響はまるで違う。だから私がもし社長だったら (a)の間違いは許せないものなのである。

もしこの議論において、あえて正しいか否かを付け加えたいというのなら、その議論で勝つことであって、点を何点にしたかという事ではないのである。学力を測るのに偏差値を用いることがよく行なわれるが、この問題では偏差値を考えることは、およそ無意味であるが、教育や実務の観点では重要であることを示している。

校友会に期待するもの



学校法人 工学院大学

常務理事 平 川 紀 一

今年が学園創立以来95周年になる。100周年を間近かに控えて、ここで乾坤一擲、大飛躍を目指すべき時であろう。

本学園は明治20年の創立以来、官学的色彩の極めて濃厚な学校であった。初代の特選管理長は帝国大学総長であったが、校長以下教育の任に当たった人々も、殆どが当時の工科大学校の教官であった。このような傾向は今も続いており、教授の過半数が国公立大学の出身者で占められている。

このことは学園を地味で堅実なものたらしめる上ではプラスに働いたかも知れぬが、親方日の丸意識を脱却せず、母校意識を稀薄ならしめている点ではマイナスに働いたといえよう。

私学は自らの必要とする費用を、自らの力で稼ぎ出さなければならない。私学の財源の大宗を占めるのは学費であるが、そのほか国や自治体からの補助金、在校生の父母や校友などからの寄付金、収益事業からの収益などがある。本学園の場合、目下の所収益事業は殆ど無いに等しく、寄付金については在校生の父母からのものが恒常的かつ大部分である。国の補助金は経常的支出の約半を占めるまでに年々著増してきたが、国の財政硬直化のため、今後は減額を余儀なくされそうである。学費についても、可処分所得の実質減が生じてきていることを考えると、その値上げはできるだけ避けるべきであろう。しかし日進月歩する科学技術の水準を保ち、教育や研究の質的向上を計るには、多額の費用を要することは言うを俟たない。

学園が大学を中心に運営されるようになった昭和24年から、以来30余年になるが、この間学園の社会的評価は必ずしも高まらなかった。人によっては長期低落傾向が続いているとさえ極言する。確かに明治20年に工手学校として発足した当時は、短期速成の各種学校であったにも拘わらず、築地の工手学校の名は天下に鳴り響いてい

た。

それに比べると、現在の学園は形式は整備されたとはいえ、多数の類似諸学校の間に埋没して、いま一つパツとしない。

かつて開設後間もない明治29年の失火に築地校舎が全焼した時、また大正12年の関東大震災で角筈の現校地に移転を余儀なくされた時、また昭和20年に空襲で大きな災害を受けた時、廃校の危機を乗り切り、新たな発展の契機たらしめたのは、校友の熱意と拠金によるところが大きかった。

学園は創立以来95周年を過ぎ、100周年を目標の間に控えている。この機会に一大飛躍を遂げ、創立時の高い評価を超える学園とするには、物心両面に亘る校友の熱烈な母校愛が、大きな鍵となろう。学園の教学面を充実させる為に、何卒一臂の力をお貸し願いたい。

これまで学園は国立大学の出身者が中心になって運営に当たってきたこともあって、校友に対する配慮は必ずしも十分であったとはいえなかった。私共はこの点の反省に立って教職員、在校生（及びその父母）、校友が三位一体となって、よりよき学園の創出に協力する態勢を整えたい。

校友は全国に3万余を数え、産業界の中核を占めている人も少なくない。これらの人々の愛校心を振り立たせるには、学園側の働きかけも大事であろうが、それ以上に校友会自身が校友にとって魅力のある存在でなければならぬ。

校友会は12年間の長いトンネルを抜け出して、昭和54年に合同が成立した。この新生校友会に、校友中の最もよき部分が結集し、母校の発展に私心のない協力を賜わると、切にお願いする次第である。(1982. 11. 2)



本学の大学院について

大学院運営委員長 山口章三郎

日本の近代文明の利器の海外への進出は、諸外国の脅威の的となっており、同時にこれらの利器の誕生は欧米人によるもので、日本はその育成の妙を發揮したに過ぎないという批判も酷しいことは、英国首相サッチャー夫人の言をまつまでもない。今後日本が世界の中で真に敬愛される民族となるためには、科学技術による新しい製品の育成とともに、その誕生にも大きな役割を果たすようになることが重要であろう。

そのためには、模倣改善の技術から独創開発の技術とその基礎学術とが必要とされ、大学教育においては、特に研究に重点をおく大学院の果たす役割を見逃すことが出来ない。

さてわが工学院大学の大学院はどのような状態にあるのであろうか。

本学大学院が設置されたのは、修士課程が昭和39年、博士課程が昭和41年で、当時新制大学工学部（国、公、私立とも）における機械、工業化学、電気、建築の四専攻をもつ博士課程大学院設置認可の第一号に相当し、旧制大学の工学部と並んだものとして、本学の著しい躍進振りが注目された。

大学院設置のためには大学の基準を上回る教育施設と十分な教授研究陣容とが不可欠の条件であり、八王子に広い校地と新設備を増設することは当時大学設置審議委員会の委員でもあった野口尚一学長と宗宮尚行教授（学士院会員）の努力によった事はいままでもない。

日本工学会の「我が国工学百年の歩み」の年表の中で、工業に関する私学の創立が記載される唯一のものとして工手学校が挙げられ、火災で焼けた明治29年にはその復興に御下賜金まで賜った輝かしい歴史をもつ本学園が、その後大学工学部を設置した早大、慶大、日大に先んじられていたのが、この博士課程大学院設置によって、やっとその遅れを取り戻したという感も深い。

このように一応骨格が出来た本学も、その後その肉付を果すべく新五ヶ年計画が樹てられ、その第一歩として八王子校地に化学棟 500 坪が建築され、ついで機械、

電気、建築に各500坪、高校敷地内分の代替500坪計2000坪の研究実験棟増築予定のところ、学生騒動時代に入り中断され、十余年経過の今日までも放置されていることは残念なことである。

しかしその間、設備不十分なながらも大学院の果たした業績は以下の通りである。

表1 工学院大学大学院修了者、在学生一覧表(1982-10)

| 課程別 | 専攻別 | 機械 | 工業化学 | 電気 | 建築 | 計 |
|------|-------|----|------|-----------|-----|-----|
| 修士課程 | 修了者 | 97 | 82 | 122 | 138 | 439 |
| 博士課程 | 単位修得者 | 13 | 6 | 16 | 2 | 37 |
| | 学位取得者 | 4 | 2 | 13 (4) | 0 | 19 |
| 在学生 | 修士課程 | 7 | 5 | 6 | 26 | 44 |
| | 博士課程 | — | 1 | 4 | — | 5 |

() は課程博士

博士の学位は、5ヶ年の学習課程と所要単位の修得と学位論文合格とを条件とする課程博士と、提出論文と学科試験との合格を条件とする論文博士とがある。しかし論文博士を授与するには、一人以上の課程博士を誕生させることが必要条件となっている。本大学院では昭和51年奥野治雄教授指導による課程博士が誕生し、以後表に示すような修了者および工学博士19名を出し本学または他大学の卒業生からの論文博士も6名を輩出している。

博士の学位は最終の目標ではなく、研究者にとって一つの目標で、この目標につられながら自ら研究能力が高められ成果も挙るもので、一つの一里塚であることはいままでもない。しかし今後本学園出身者で研究に携っている方で、その成果が出た場合、それを検討し文献化する手段としても、本大学院を利用して学位論文文化されることが多くなることを期待し、併せて本学の社会への貢献度が顕著になることを切望して已みません。

付記：本大学院の歴代の運営委員長は、宗宮尚行、大柴文雄、吉沢武男、山口章三郎の各教授で、昭和56年度の本大学院への文部省からの経常費補助金は4,972万円である。



ホロニック・パス

電気工学科主任教授 柿沼敏雄

請はいささか旧聞に属するが、2年ほど前に故大平総理の政策研究会のグループが「科学技術の史的展開」という題名の報告を出している。私はたまたま義兄が同グループの議長をしていた関係で、それを読んでみたことがある。内容を一口でいえば、現代において「科学技術の停滞」といわれているものは、巨大科学・巨大施設化に代表されるハード・パス（いわゆる人工の途）や、原子論に代表されるアトミズム（いわゆる要素還元主義）の行きづまりを示すものである。しかしこれからの新しい途は全体と個との関係を重視してその調和を図り、ハードとソフトの調和のとれたホロニックなものでなければならないとしている。このような途をホロニック・パス（より正確にはホロニック・フレキシブル・パス）と名づけている。ここに出てくるホロン（holon）という新しい言葉は全体を表わす hol と、個を表わす on とが組合わされてきた言葉であり、連帯性をもった個を意味している。出された報告は、ざっとこのようなものである。私はこの新しい立場は私の専門とする科学技術だけでなく、方法論的には人間社会における現象—社会的、政治的、経済的現象のさまざまなレベルで適用されるものと考えて興味をもっている。

大学の活性化の方法はいろいろ考えられる。アメリカの大学にみられるような競争原理の導入とか、産業界とのいわゆる産学協同とか挙げればきりがないところであろう。ここで一例をあげてみれば、本学は新宿という人工的そのものの街の真中にあり、一方八王子は最近かなり市街化されはしたものの、まだ田園的な色彩が残っている。この二つの立地をうまく活用していくことは、人工と自然との調和をはかるといふまさにホロニックなものではないであろうか。この時に真に要求されるのは、建物などのハードではなくて、教育をいかに展開してい

くかのソフトではないかと考えている。また別の例を挙げれば、大学は地域社会と無縁ではない。しかし本学が新宿という地域社会に何を貢献してきたか、また逆に新宿が本学に何かの期待をしてきたか、十分考えてみることも必要であろう。これも大学と地域社会との連けい調和という点では、ホロニックそのものであると考えている。

このように私はホロニック・パスの考えを楽しんでいるのである。とかくソフトというすぐコンピュータのソフトぐらいしか頭に浮ばないのが技術者の悲しさであるかもしれないが、政治にしろ経済にしろそこにあるのはいわゆるソフトなのではないだろうかと考えている。いま本学で真に大切なものもソフトであるという言い過ぎであらうか。

第25回工学院大学研究発表講演 ならびに学内展示会

下記のように行われました。

- (1) 講演会（機械、生産、化学、電気、電子、建築、関係）
日時 10月31日（日）13時～16時30分
場所 新宿校舎 4階5階各教室
- (2) 学内展示会（学園祭）
新宿校舎 11月21、22、23日
八王子校舎 10月31、11月1、2日



校友の皆様へ

建築学科主任教授 正木三省

今年も秋が深まってまいりましたが、校友の皆様には各方面でいろいろと御活躍のことと思います。

大学の建築学科も今年で創設27年、その母体となった短期大学部建築科の創設からはちょうど30年になりました。私はさらに、そのまた母体のような高等学校建設科の創設の時から工学院にお世話になっているので、すでに34年になってしまいました。

思えばいろいろな事がありました。しかし、大勢としては時勢にも恵まれて、大きな発展をとげてきたことはご同慶の至りです。

大学建築学科の近況については、昨年の校友会報で山下前主任教授がかなり詳しくお知らせしました。

要するに、建築学科は少なくとも世間一般の認識よりずっと充実しており、高いレベルにあると思われまふ。一部はくり返しになりますが、在学生、卒業生は内外の設計競技に何回となく上位入選したりしており、昨年とはとくに、大学院生の作品がポーランドで行われた国際建築家協会主催の世界学生建築設計コンクールで入選しました。世界288校参加のうちで、日本からの入選は本学、ほか1校であり、この事からしても本学建築学科は国際的レベルに達したと思われまふ。

また、環境・設備系分野の太陽熱利用の研究などは、学会でも先端を行く研究として内外から強く注目されており、時流にも乗っているのです。教授や学生はテレビにも何回か出たりしていました。

その他、専門分野などの関係でこれほどは目立たないものの各分野での評価は高く、大学院も早くから博士課程までも備え、各教員は研究に教育に、また研究としての実際の活動などに大いに活躍しております。

卒業生の皆様の活躍もめざましく、広く各方面で立派な実績を上げておられるのは、皆様もご承知のとおりです。

しかし、入試などについての本学の評価はあまり高くないのは残念なことです。これは本学が世間一般に知名度が低く、実態の認識も不十分な事などが大きな原因だと思われまふ。

学園は優秀な卒業生を世に送り出すことが大きな目標ですから、素質のすぐれた学生を入学させなければならぬわけです。そのためには、私たちはまず、学園の他の学科や学校の方々との間の理解を深め、一丸となつての長い努力が必要で大学名変更問題なども含めて、本学のイメージアップをはからなければならぬと思われまふ。

また、校友の皆様には母校に誇りを持って本学の実態や特長を人々に説いて認識を広めていただき、優秀な学生がより多く本学に集まるようにご支援をいただきたいと思われまふ。

学園の再開発、拡充の計画もだんだんに具体化しようとしており、これは実態があると命運にかかわるような大事業と思われまふ。

古い事になりますが、大学も経理の面では高校などに頼っていた時代もかなり長かったようであり、また、学園も経営が苦しく、かなりの土地を二度も売らざるを得なかったような時代を経てきました。現在の学園の大部分の方々には、そういう苦しい時代の情勢を理解するのは無理でしょうが、時流はむしろ昔のようなきびしい方向に向いているように思われまふ。

学園の将来像はなるべく高く望むべきだとは思いますが、私たち苦しい時代をじっくりと体験してきた者は、現在は比較的には少数になったものの、「とにかくより堅実に」というような願いは切なるものがあるようです。

校友の皆様には、母校の重大な時機にあたり一層のご支援をお願いし、あわせて皆様のご健康を祈っております。



世界の俳句

一般教育部 教授 松尾靖秋

いささか手前味噌の話で恐縮だが、私の専攻と関係のあることでもあるので、いま世界的な規模で広がりつつある俳句についていささかその見聞したところを述べてみたい。ただ、その詳細については総合誌「俳句」の昭和56年7月号に「海外の俳句事情」として、また今年9月号に「俳句における国際性」として発表したもので、あるいはそうした方面に関心のある方の眼にはふれたかもしれないので、いささか二番煎じということにもなり、また紙幅の制限もあって、わずかにその片鱗を述べるしかないが、御諒承願いたい。

私がソ連はじめ欧米の日本文学研究状況の調査のために本学からはじめて出張したのは昭和41年のことで、その後、公私あわせて5回ほど海外に出かけたが、その間日本文学の研究や翻訳には格段の進展が見られたという事実がある。それはもちろん国際社会における日本の国力の評価と決して無縁ではあるまい。そうした背景のもとで、最も日本的であり、世界にも類のない短詩型の俳句が、各国の人々の興味をひくところとなった。それはまず翻訳・研究・創作という形で現われるが、ここでは特に創作の面についてふれてみよう。

まず第一にとりあげられるのは西ドイツである。ドイツの詩に俳句が影響を及ぼすようになったのは19世紀末のことと、有名な詩人リルケも俳句的手法をその詩の中にとり入れたといわれている。1940年代になると、さまざまな都市で俳句のグループが生まれ、創作活動も盛んとなった。いまウィーンに住む高齢の女流ハイク作者ボードマスホフは、見事な俳句を随所に挿入した堂々たる本格的な句集を出しているし、ミュンヘンに住むG・クリングは、日本語「闇夜の鹿」や「雨いとし」と題する句集を出し、つい先日私の手許に届いた「Im Kreis des Jahres」は毎ページにカラー写真を入れた、まご

とにぜいたくな豪華な句集である。いまドイツの各地には水原秋桜子の句碑が22基もあるから驚きである。句碑といえば、ロンドンの王室植物園キューガーデンには虚子の句碑がある。

次に、オランダでは、古く俳句の芽生えがあった。170年前長崎のカピタンであったヘンドリック・ズーフが「春風やあまこまはしる帆かけぶね」の句を作ったことが1816年（文化13年）の、随齋成美の序をもつ「四海句双紙」に見える。「あまこま」というのは琉球語で「あちこち」の意である。オランダでは15、6年前からハイクの創作が次第に盛んになり、一昨年はユトレヒトでハイク作者の会が組織された。

フランスでは19世紀の後半、ゴンクールの日本趣味が文壇や画壇の流行となって、歌麿や清長が紹介され、いわゆるジャポニズムが取り入れられた時代に、俳句や短歌もフランス人に親しまれ、更に、1936年に虚子がフランスを訪問した際は、パリでフランス・ハイカイ派の詩人たちと交歓したことが知られている。

いま最も創作ハイクの盛んなのは恐らくアメリカであろう。1963年、アメリカで最初の俳句雑誌「アメリカン・ハイク」が創刊され、いまでは俳句専門の雑誌やハイク・クラブが各地にあり、熱心なハイク・マニアも多い。またハイクが小中学校の教育にも取り入れられている。

また最近では中国や、更に遠くはアフリカのセネガルで、またモロッコでも創作ハイクが始まったという。明治以来もっぱら輸入に仰いでいたわが国の文学が俳句を通じていまや輸出に転じたということは、日本文学のためにまことに慶ばしいこととなさなければならない。

同窓会だより

日本に於て生産される「小型車」はなぜ1,500ドルも安いのか

—ある米国経営者のみた日本の企業—

機械工学同窓会評議員
山崎隆一

1982年5月下旬英国バーミンガムで開催された第7回「金属プレス工業国際協議会」に於て、米国金属プレス工業協会（AMSA）のキャディッツ氏は日本の自動車産業の成長要因についてその調査結果を発表し大きな反響を呼んだ。以下はその米国の経営者がとらえた日本の産業構造のあらましである。

日本人は彼等のいうところの4S（整理、整頓、清潔、清掃）は品質を向上させる、と強く信じておりその為に費用をかけている。必要なものを必要な時に必要な数だけ要求する生産方式を達成する為の技術修得にかかる徹身的な努力は信じられない程のものがある。従業員はよく訓練されており強い愛社精神と高度な動機付けによる積極的な「やる気」は、効果的な経営情報と相まってますます強化されている。日本の材料原価は米国より20～30%低く見積られている。日本の労働者に対する報酬はボーナス福利厚生費等直接比較はできないが米国より20%程安いと思われる。

日本の産業構造は競争力を傑出させる為に一致協力しているが、米国にはそのようなものはない。しかもこの努力は大企業の社長から小企業の一般従業員に至るまで広く行われている。具体的な指針は次の如くである。

- ①資源の効果的利用とあらゆる分野の無駄排除。
- ②高付加価値戦略。
- ③労働原価削減の為の機械化と自動化。
- ④従業員の訓練と品質管理の推進及び生産性の向上。
- ⑤工場団地の開拓と最少在庫量達成の為の技術力。
- ⑥世界的視野に立って長期間の繁栄の為の投資する経営努力。

かくして、日本の競争力優位の特性は、技術の優秀さや科学の大進歩に依存するよりも非常によく管理された労働力によって伝統的技術を徹底的に応用すると共に、まさに数十年にわたって精進してきた企業や工場のありとあらゆる努力の成果なのである。

この米国の経営者は、日本の産業構造のあり方について、社長から従業員にいたるまで、一致協力して無駄排除を行い、徹底的に原価を削減し続ける日本人の後ろ姿に、米国にはない文化の相異をみいだしたのかも知れない。

（城山工業株式会社取締役社長
（株）日本金属プレス工業協会常務理事国際委員長）

創立百年の年輪を数年後に迎えて母校に望む

電気同窓会会長
内山 太

昔、距離というもの実感は、道中宿に泊りながら旅をつづけ幾泊幾里というものさしであったが、交通機関の発達によって、もはや距離の概念は時間というものさしに大きく変化してしまった。

科学技術、特に工学においては、技術の進歩がいちじるしく、産業界での工法、生産効率の改善によって大幅に生産時間の短縮、大量生産というように経済性の向上がはかれてきた。この進歩状態は、年、半年という単位のように思われる。これがエレクトロニクスの進歩にともなって小型化、省エネルギー、省資源、そして高密度、高品質、高能力化が進み、この技術の進歩は、月・週の単位になり研究部門では、1日単位の競争になって来ている。これらの大きな発展は、今までの技術の高密度・高集積化によって成されてきた。しかし、これからの科学は、省資源・省エネルギー、省力化に力点を置くだけでなく、脱石油エネルギーとして水のエネルギー利用バイオエレクトロニクスによる新農水産工業の発生、生体膜開発による医療、化学分野の一大躍進・生産工程の大変革、そして、光エネルギー光源の研究開発に伴う光合成技術の開発研究の進歩により一大産業革命がまた来るのではないかと考えられる。

このような重大な時期に、我が工学院大学は、創立百周年という大きな年輪を迎えんとしている。工学院大学は広く皆様の知恵を求め、また単なる知識にとどまるこ

同窓会だより

熱を傾けておられた天野太郎先生が難病に罹られて「建築ができなくなってくやしい！」とっておられるという話を伝え聞き、何らかの形で、皆でおなぐさめできる方法を探そうということになり、そうこうするうちに、いろいろの活動を始めることになった。そしてここに「有機的建築の会」が発足したのであった。顧問として天野太郎先生を仰ぎ、相談役として樋口清、波多江健郎、十代田昭二、武藤章、山崎弘、山下司の各先生方にお願ひし、事務局長として南迫があたることになった。「年に4回の講演会などの集まりをもち」「会員自らがよき建築をつくるための研鑽の場とし、あわせて、母校との結びつきを深めることを目的とする」などという会則がつけられた。既に3回の講演会が催されたが、参加者は毎回100～150人という、この種の研究会としては盛況といえるであろう。

さて第2の動きは、祝賀会の折に集められた寄金によって建築学科の学生諸君への奨学基金にしようという動きである。大庭先生を中心として行われたこの記念祝賀会は、教員同窓会から選ばれた委員会によって行われたが、この奨学金の設置によって、ようやくその任を終えることになるのだが、このような動きから、次代の工学院大学を背負う人物が育成されることを心から願ってやまない。本年95周年を迎えるに当り、既に2代目、3代目が在学している今日この頃であるのだから。

広化会健全発展のために

広化会会長
富所良二

会員の皆様お元気でご活躍の事とお慶び申し上げます。さて、一昨年の総会を広島での学園校友全国大会に併せて行いましたが、非常に好評を得ました。そこで今期総会も11月27日京都全国大会に併せて行う事は、この5月校友会誌発送時、同封の折込み文書等で御承知と申します。

となく、八王子の再開発を有効かつ合理的に行い、施設、設備の拡充をはかり、学生が、のびのびと自信と誇りを持って勉学できる場を与える。これを礎として、新宿校地を未来科学技術研究推進の拠点となるように再開発を行う。教学においては、単位主義・教科科目主義の講義及び実験・実習を改めて、実のある最新科学技術を教授し、旧態依然とした権威主義を排除し、新しい科学技術の芽を育成し大樹させる研究教育に力をそそいでもらいたい。

また、事務系職員は、教職員の勤務体制に、ひきずられることなく、職務基本を遵守し、学生、卒業生に適切な奉仕していただきたい。また我々同窓生は、母校で学び得た知恵により社会で活躍していることを感謝し、母校の発展、躍進のために、尊い力をさしのべ協力して下さることをお願い申し上げます。母校創立百周年を間近に控えて21世紀の新しい科学技術の芽に適応した感応性の高い科学者・研究者を送りだすために、母校の改革と一層の努力を望むしだいです。

建築学科同窓会だより

建築学科同窓会副会長
南迫哲也

大学建築学科の創設25周年記念祝賀会が一昨年行われてから、同窓会の内部に、いろいろの動きが生まれた。

ひとつは、いままで各個バラバラであった卒業生の意識が、母校を中心としてひとつに纏まり、それを契機として、各研究室毎の会合がもたれるようになったり、また同期会の一泊旅行に出掛けたといったニュースなども、頻りに聞かれるようになった。中でも創設当時のOBは既に40代から50代に突入する年令に達し、ようやく家庭的にも、社会的にも充実してきたのでありましようか、学生時代に立ち戻って、何かをやろうという意欲に燃えた篤志家が増えてきた。たまたま創設当時建築教育に情

同窓会だより

一方、京都は、交通至便で魅力ある京都でもあり各地の会員も集り易い地の利を得ております故、同窓会も合せて京都の楽しい一夜を語り合いたいと存じています。なお、別紙案内通り、村上先生から御講演戴くと共に多くの恩師の先生方にご臨席願うべく努力致してまいります。

悲しいお知らせに触れなければならぬ事は痛恨の極みですが、去る4月28日に高橋史朗教授(享年63才)が急逝され、その悲しみも乾かぬ裡に、本会の産みの親であり、より良き先輩である山根名誉教授(本会名誉会長)が、東京医大病院で薬石効無く、8月12日他界され、8月17日浅草浄閑寺にて大学および関係者多数のご参列を得、葬儀が、しめやかに行われました。応化会としては、筆者が、代表して弔辞を読み哀悼の意を表して参りました。なお、応化会本部では、11月14日に別紙の要領で山荘会と合同で「故山根先生を偲ぶ会」を行います。また、全国大会終了後、応化会の懇親会を催しますが、その席で、両先生のご冥福を祈りたく考えていますので、多くのご参加により、生前の思い出話等でご追悼くだされば、さぞ両先生も草葉の蔭でお喜びの事かと思えます。

既にご承知かと思いますが、母校も都営地下鉄線の乗入れに関連して新宿校舎の再開発等多くの問題をかかえており、学園将来計画をはじめ多事多端に直面しております。同時に、我が応化会も時代の変遷により従来の会費だけでは財政が成り立たないばかりか、事業の運営ができない状態です。現実、今年度の予算不足は如何ともし難く、応化会の将来計画に基づく財政基盤を如何に確立するか、財務委員会で検討を行い、常任委員会等で慎重審議の結果、応化会が、より有意義な会として発展していくためには、受益者負担主義に徹して会費を特別に徴収するしか道なしという結論となりました。会費の徴収策と同時に、全会員へ有効に還元するため、各専門分野のセミナー、特に、未来産業の一つ「バイオテクノロジー」等も、組上に載せて行かねばならないと思えます。また、今年度予算編成も積立金の一時借入でないと収支の調整ができません。総会ではこの様な多くの諸問題を合議でご検討戴き、応化会の益々の発展のために、ご批判ご叱正を賜りますよう会長として心から切望致します。(’82年10月1日記)

高校同窓会だより

高校同窓会長

足立 剛一

会員の皆様にはますますご健勝の事とお喜び申し上げます。

平素は同窓会の運営につきまして、会員の皆様には種々御尽力下され感謝いたしております。

私共の同窓会も昭和42年に発足いたしまして今年で15周年を迎えることになりました。現在、会員数も12,000有余人という大きな団体になりました。

又、今年度の総会は創立15周年と宮沢先生の追悼会を兼ね去る10月24日に新宿校舎に於て行い、会員多数の出席のもとに学校関係の諸先生を始め校友会の役員等のご来臨のもとに盛大な記念総会を行いました。

総会の案件につきましては先般お届けいたしました会報でお知らせいたしましたが、今年度は役員改選にあたりその結果皆様のご推薦により引き続き私が会長に再選されましたので宜敷くお願いいたします。

尚会則の一部変更につきまして可決されました。会則第14条役員の任期は2カ年とする。学校法人の役員の任期及校友会の役員任期が3カ年でありますので、これに合わせるために同窓会の役員任期も3カ年に変更し可決されましたのでご報告いたします。

尚先般の役員会に於て同窓会の組織強化のために役員役割分担が決まりましたので役員の方々の一層のご協力をお願いいたします。

又、校友会の諸行事につきましては、すでに御紹介して居りますが、同窓会員の皆様方の御参加を特にお願いいたします。

また長年の懸案事項でありました名簿のカードシステム化による整備も整いましたので住所等変更された方々は事務局にご連絡下さるようお願いいたします。

同窓会だより

皆様もすでに御承知の通り今学園は将来計画大綱案及校名変更等種々問題が山積しています。

会員の皆様には学園発展のために建設的なご意見と御協力をお願い申し上げます。

最後に会員の皆様の御健勝とご発展を心からお祈りいたします。

学園将来計画について

専門学校同窓会副会長

南 雲 芳 夫

本学園の将来への展望を明るいものにするべく、日夜御苦心されている当事者の方々、その御心労を推し測るとき、誠に頭の下がる思いを禁じ得ません。学園関係者の期待と、未来を切り拓くことの難しさとの間に位置し重畳しさに耐えながらの毎日であることを、私どもも十二分に承知している次第です。

今日まで、昭和56年10月発表の将来計画案について、種々の意見が出され、様々な検討が加えられ、そして、この案が一応白紙還元された事態を踏まえて、以下に少しく考える所を記してみたいと思います。勿論、述べようとするこの殆んどが、要路にある方々の手で既に組上に乗せられたものであろうとは存じますが、その際には御容謝を願ひ上げます。

第一点は校名変更の問題ですが、本質的には変えるべきものではないと思えます。若しそれでも考えますれば、余程の理由があって然るべきです。従って、この問題が提示されている以上、十分に根拠のことがあってのものと考えられます。学生集めのために安易に考えられたとすれば、大いに問題です。既に考慮の内とは思いますが、校名変更に伴う諸経費も膨大なものでしょう。

人気の不足に関して校名に責任はありません。まして歴史あるそれですから、慎重すぎる程そうでなければならぬでしょう。但し学園の内容と外容を全く一新させ

るとの断固たる決意が実行の一連であれば考える余地はあります。とにかく、校名変更が目先だけの気分一新の働きにしかならないようなことは避けるべきです。

第二点は八王子校舎をどうするかの問題です。結論から言えば、外観も内容も真に工学院大学の名にふさわしいものを巨額の費用を投じて作るべきです。膨大な借金による財政上の負担の可能性をその極限まで追求すべきです。私は今や、都心の新宿の狭い場所に、緑も木立もないアスファルトの中に、大学があらねばならないという時代でもないし、社会環境でもないと考えます。

今、大学が従来の姿からの脱皮が求められているとするなら、教育内容の充実も勿論のこと、外的な面にも考慮が十分に払われるべきです。つまり、建物の外観、キャンパス全体の余裕と優雅さ、等々。

直ちに全学部を八王子に移転することが無理なら、百周年を目指す長期計画など、最終的には、全移転を基本としたプランの下に、もう一度検討を是非加えて頂きたい。

第三点は新宿の校地をどう活用するかに関してですが、教育の場が都心にある必要性を考える人々がかなり多数ある筈です。それは大学生では決してありません。大学生は八王子へ行けば良い。都心からの交通手段も問題はないし、地方からの学生の下宿も、新宿より経費がかえって安いという点を指摘すれば十分でしょう。従って、大学以外の現在あるもの、既ち専門学校などは従前通り、この地で運営すべきだと考えます。夜の部などは都心でなければ意味がないことは、くどくど申す必要もありません。

第四点は、従来話題にあまり取り上げられていないことですが、大学に直結する附属の中学校、高等学校を増設することを真剣に考える必要があります。東京都内の新設は無理ですが、埼玉県、千葉県はむしろ求められているのではないのでしょうか。男子の高校はまだ数が足りないようですし、大学へ直結する中学、高校は大変に魅力のあるものです。これによって、大学の定員の三分の一、或は半分を確保できるとするなら、最終的に学園全体の安定に関連するわけです。ですから、附属の高校、できれば中学校もですが、複数の新設を考える度量があつてしかるべきです。更に大学そのものも、女子学生を

同窓会だより

受け入れる用意をすべきです。しかも従前の枠組ででなく、学部の新設を考えても良いのではないのでしょうか。短大も可能だと思います。何も大学が男子に限られるものでもありません。男子だけの大学こそ、少し異様ではないかとも思われます。経営に寄与する一つの方法と言えます。

以上、いづれも関連する事柄を無理に四点に区別して記しましたが、全体として統一的に考えて頂ければ幸いです。先にも記したように、上記の考えは、多くのしかも基礎的な諸条件を無視している点があるかも知れませんが、心情を推察願ひ度いと考える次第です。

十年一昔

経理部長 南 喜八郎

十年一昔という言葉があるが、校友会の経理を、十年前と現在とを比較してみるのも単に老人の懐古趣味だけではない。

昭和46年度の運用財産は2415万円であったのが、56年度には、535万円と激減した。又運用費は46年度には564万円だったものが、56年度には784万円と増加している。近所のそば屋で当時180円だったそばが現在300円で実に66.6%も値上りしている等諸物価の値上りを考えた時、運営費の39%増は当然のことではなかろうか。又賛助会費も年1口千円だった46年には95千円の収入だったのが、合併後1口5万円になってから収入0という有様です。

しかし合併前に校友会費2千円を納めていた会員が、合併後は会費は不要ということを知らなかったのか、56年度に3名合計6千円送ってきたので、経理上賛助会費の一部として処理したが、その後1口2千円で1口以上の分納が出来ると、規約が改正されたことは大変結構なことと思う。

又小野塚支部拡充部長が北海道の支部総会で校友会の窮状をうったえ、賛助会員の勧誘をしたところ、早速申

込をうけ非常に感激したとのことで、それ以来支部総会には領収書と振替用紙を持参して、相当の成果をあげておる次第です。又本年5月30日総会後の懇親会の席上、小高副会長より詳細なる説明があり多数の賛同を得て当日だけでも96,000円の収入があった。そして10月現在で162万円に達したことは大変喜ばしく又感謝致しております。殊に特筆すべきことは、校友会財産の危機を憂慮された前島会長が、非常なお骨折りで学校当局の理解を得て、56年度新入生より校友会費の徴集の制度を確立していただいた事です。これによって1千万円以上の別途積立金が出来たが、これは卒業年度がこななくては使用出来ません。57年度は運用費950万円の予算の承認を得たとはいえ、無駄な出費は敵につしむことは勿論ですが、学園に対しては、優秀な学生の表彰、或は学修活動に助成金を贈る等、より一層進捗を深め、又賛助会費の一部を支部に還元し、支部活動に少しでもお役にたて、校友会の益々の発展を期待して理事一同は頑張っておりますので、賛助会員増強には一層のご理解とご協力をお願いいたします。

近況報告

校友評議員 内山 太、落合康男
 // 小野塚政雄、森山健次
 学識・経験者評議員 吉田辰夫
 以上14名

◎創立記念式典のとりやめについて

創立記念日には、昭和42年度以降毎年記念式典を挙行いたしておりましたのをとりやめ、節目ごとの実施にあらため、来たるべき100周年記念式典を盛大に迎える予定です。

なお、徒来この式典の場で行ってまいりました永年勤続者表彰及び成績優秀学生・生徒に対する奨学金授与については、創立記念日またはその前後に執り行います。

(総務部長 玉置)

◇大 学◇

★学園将来計画大綱案(昭和56年10月)に対する教授総会の検討結果について

教授総会内に検討委員会(委員長河合教授)を設け大綱案について諮問していましたが、委員会の答申(9/14付)がだされ、さらに教授総会(S57.9.27)において検討した結果を10月1日付で、高山理事長、伊藤学園将来計画委員会委員長に対し、次のように申し入れた。

①校地問題については、統一的な理想代替地の入手が困難であり、学園将来計画の早期実現が望まれている現状から判断して、新宿校地の再開発と八王子校舎の拡充は本学園の発展のため妥当なものと考えられる。

②「都心型」学園の構想については、本学園の将来像として大綱(案)が提唱した「都心型」指向は、その内容が必ずしも明確ではないので、よりわかりやすく明らかにする必要性があろう。本学園の将来像は都心地の新宿校舎再開発と郊外地の八王子校舎の拡充を綜合したものであることが望ましい。

③その他具体的問題点として、大綱案に示されている一時的全面移転計画案は各種の問題があるので再検討されるべきである。この他4項目について指摘(紙面上省略)し、早急に学園将来計画大綱案の改訂を申し入れた。

★父母懇談会について

後援会の年間行事として開催されている地方父母懇談会は、今年で3年目を迎えた。この懇談会の主旨は父母

◇学校法人◇

(1)本学園関係者叙勲について

昭和57年春の叙勲で、本学専門学校小浪博名誉校長が勲四等瑞宝章を、秋の叙勲で横田道夫名誉教授が勲三等瑞宝章を各々受章された。

(2)工学院大学教育振興協力募金状況

9月30日現在

● 払込件数 293件(前年同時期 346件)
 ● 払込金額 23,880千円(// 22,575千円)

(3)八王子校舎施設整備拡充計画について

八王子校舎施設整備拡充計画の一環としての排水処理管路工事を57年度に完了し、学生部室棟の建設を58年2月頃から着工し、58年度中には排水処理場設備の建設が着工される予定である。

(4)寄付受贈について

大学後援会から3月24日軽井沢学寮、富士吉田セミナー校舎及び学生部に16mm映写機、カラーテレビ、カメラ等総額933,790円相当の現物寄付、7月及び9月に富士吉田セミナー校舎にKSK移動映写機、移動式掲示板、放送設備設置工事一式、来客報知装置等総額596,500円相当の現物寄付があった。

その他ビッグモールド(株)から548,000円相当のビデオカセット一式、日本重化学工業(株)から200万円、コンピュータサービス(株)から1,498,000円相当のマイクロコンピュータを2台寄贈された。

(5)寄附行為改訂委員会の設置について

本学園の寄附行為については、第91回(新)評議員会において、その改訂の為の委員会を発足させることになっておりましたが、これにつき、9月17日開催の第465回理事会において寄附行為改訂委員会を設置し、次期の評議員選出に間に合うよう検討することになった。

寄附行為改訂委員会委員

常務理事 富子勝久、平川紀一
 理 事 遠藤鎮雄、前島為司
 監 事 北野 均
 主任教授選出評議員 山口章三郎
 職務上評議員 玉置久庸
 学内選出評議員 洞沢 成、山本芳太郎